

パーソナルネットワークの影響再考

A Reconsideration of the Influence of Personal Network

荒 牧 草 平
ARAMAKI Sohei

【要旨】 ネットワーク構成員との相互作用の中で影響を受けることは、「ネットワークの影響」という概念でとらえることができる。しかしながら、ネットワーク構成員同士の類似性は、もともと似た態度を持つ者同士が同類結合しているに過ぎないのではないかという疑問も示されてきた。この問題に対して、本稿では以下の考察を行った。第2節では、特定の行為に限定したネットワークをとらえることの重要性、および分節化されたネットワークの使い分けについて解説した。第3節では、ネットワークの「選択」だけでなく「影響」に着目する意義を明らかにした後、企業などの組織におけるフォーマル・ネットワークやインフォーマル・ネットワークの影響に関する先行研究の議論を整理した。第4節では、以上をふまえて、ネットワークの影響を「制約機能」「支援機能」「参照機能」「浸透機能」「居場所機能」という5つの機能からとらえることを提案した。

1. 「ネットワークの影響」への着目

人は、何らかのつながりを持つ多様な人々と、様々な理由によって日常的に相互行為を行っている。家族と食事をともにし、近所の方に挨拶をし、職場の同僚と協力して仕事をするなどというように。そうして一緒に仕事をしたり、食事や会話を共にすることで、互いの状況や意見を把握し、相談に乗ったり、力を合わせて協力したりするのである。もちろん、その一方で、互いに競い合ったり、反目し合ったりすることもある。そうした相互行為の過程で、ものの考え方や行為選択において互いに影響を及ぼし合うことも生じ得る。パーソナルネットワークに関する研究では、そうした状況を「ネットワークの影響」という概念によって理解してきた。

その一方で、ネットワークによる影響、特に態度形成に対する影響は、ネットワークの働きではなく、もともと似た態度を持つ者同士の同類結合に過ぎないのではないかという疑問も示されてきた。つまり、あるネットワークの構成員たちが類似の行為をしがちなのは、よく似た者たちが集まってネットワークを形成しているからであり、因果関係が逆なのではないかということである。

そこで、本稿では、「ネットワークの影響」について、どのように考えたらよいのか、先行研究の知見や議論を参考にしながら考えてみたい。

2. ネットワークのとらえ方

2.1. 特定行為に限定したネットワークの把握

「ネットワークの影響」について論じる前に、そもそも「ネットワーク」という概念によって何をとらえようとしているのか、本稿の射程を明らかにしておきたい。

本稿が取り扱いたいのは、研究対象となる特定の行為者(ego)に対して、周囲の人間関係が与える影響になる。このように、egoと直接的に繋がりを持つ人々のネットワークを、ネットワーク研究では、エゴセントリック・ネットワークと呼ぶ。エゴセントリック・ネットワークの研究では、通常、「重要なことを相談した相手」「親しい人」などの条件を設定し、その条件に合う交際者との関係について分析が行われる。

特定の条件(「相談相手」「親しい人」など)に合致した少数の人々だけを対象にするという意味で、こうした研究方法には限界があると言える。しかしながら、ここでの意図は、この意味での限界を指摘することにはない。ここで言及したいのは、別の限界、すなわち、明確な目的を設定せずに、漠然と「相談相手」や「親しい人」のネットワークを取り上げようとしたことによる限界である。つまり、条件の特定化がむしろ不十分だという指摘になる。その背景には、ネットワークの作用は、行為の目的に対応して発動するという考え方がある。たとえば、私たちが誰かに「相談」する時、仕事については同僚や上司に、子育てのことは子育て経験のある友人や知人に、心の悩みは心理臨床の専門家にとというように、目的によって相談相手を変えるのが通例だろう。つまり、個人の意図的なネットワーク利用は、その範囲も働きも、行為の目的によって異なると言える。

ラウマンら(Laumann et al. 1983)は、ネットワークとは行為者によって社会的事実として経験される明確な境界のあるものだとする「現実主義者(realist)」と、ネットワークの境界は、研究目的によって概念的に設定され、存在論的に独立した地位はもたないとする「名目主義者(nominalist)」の立場を区分した。上述した本稿の立場は後者に近い。そもそも、明確な境界を持つ組織化された「集団」概念ではなく、「ネットワーク」概念を用いるメリットは、明確な境界のない広い関係構造を想定しつつ、そうした関係構造の全体的文脈に位置づけられた特定の関係にフォーカス可能な点にある(野沢 2009)。行為の目的を特定するアプローチは、こうしたネットワーク研究のメリットを活かし得るものだと言える。

2.2. クリークの連結点としての ego

ネットワーク研究では、強い紐帯で結ばれた密度の高い集団様のネットワークのことを「クリーク」と呼ぶ。本稿では、このクリークを ego の立場から、「内クリーク」と「外クリーク」に区別してみたい。内クリークとは ego 自身を含むクリークのことであり、外クリークとは ego 自身を含まないクリークのうち、ego とつながりを持つものを指す。この時、パーソナルネットワーク(エゴセントリック・ネットワーク)は、図1に示したように、ego が1つまたは複数の内クリークと外クリークを持つ状態としてとらえ得る。ちなみに、図の中心に位置する黒丸(●印)が ego であり、右側の2つが内クリーク、左側の2つが外クリークを表す。

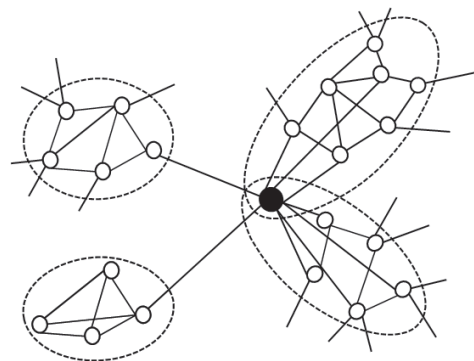


図1 内クリークと外クリーク

内クリークの代表例は、家族や親族集団、同じ学校の友人集団、職場の同僚、ママ友集団などである。様々な小集団は、ほぼこれに該当する。内クリークは地理的に近い範囲に存在しやすい

が、常に近くに位置するとは限らない。特に今日では、携帯電話やスマートフォン等の情報機器を用いて、遠方の者と日常的にコミュニケーションを取ることも容易なので、対面接触の頻度は必ずしも重要ではない。むしろ考慮すべきなのは、つながりを保つための社会制度(家族・親族・学校・職場・子ども会など)だろう。内クリークにおける交際は、日常のかつ濃い関係になりがちであるため、様々な支援の源泉となりやすい一方で、望まない統制など負の効果をもたらすことも多い。

なお、個々のクリーク同士にも繋がりがあり、互いに重なり合って形成されることもある(図2)。これは、ボット(1955 = 2006)が高度に結合したネットワークと呼んだものに相当する。その典型例とされた労働者階級のN夫妻は、同じ地域で生まれ育ち、そのネットワーク構成員は互いに友人であり、近所に住み、親類や同僚の場合も含まれた。矢部(2000)の年賀状調査における印刷工の例や、前田(2008)の調査した地方都市における育児ネットワークの例などもこれにあたる。職場と住居が近く、生活圏も交際範囲も狭い地理的範囲に留まる場合には、出会いの社会的文脈が異なる成員同士の間にも交際が生じやすいということだろう。これらの特徴は、ウェルマンとレイトン(Wellman and Leighton 1979 = 2012)の「存続型コミュニティ」のイメージに近い。ウェルマンらによれば、村落居住者や低学歴者、労働者などは資源が少なく外部とつながる機会も少ないため、存続型コミュニティを持ちやすい。

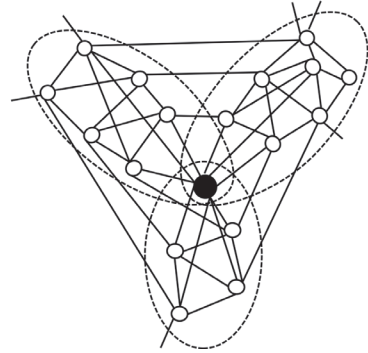


図2 多重クリーク

他方、外クリークは、枝分かれしたネットワークを特徴とする「解放型コミュニティ」(Wellman and Leighton 1979 = 2012)のイメージに近い。ウェルマンらによれば内クリークに含まれない友人がその代表例と言える。都市居住者や高学歴者は、資源が豊富で移動機会も多いことから、解放型コミュニティを持ちやすいとされる。

なお、グラノヴェッター(Granovetter 1973 = 2006)を参考にすれば、外クリークとegoとの紐帯は「(局所)ブリッジ」²⁾だと言えるが、グラノヴェッターの想定とは異なり、その紐帯は弱いとは限らない。たとえば、中学時代の親友Bを持つAが、地元を離れた大学で親友Cを得た場合、AとB、AとCの紐帯はいずれも強いが、BとCは出会うこともないということが生じ得る。こうした状況が生じるのは、egoの形成する個々の紐帯が、出会いの社会的文脈によって分節化されているからである(矢部2000)。

2.3. 分節化されたネットワークの使い分け

矢部(2000)は、年賀状調査に基づいて、個人のネットワークが、出会いの社会的文脈やegoにとって重要なカテゴリーによって分節化されていることを指摘した³⁾。言い換えるなら、egoは目的に応じて、分節化されたネットワークを使い分けられていると考えられる。これに関連して、ウェルマンとウォートレー(Wellman and Wortley 1990)は、紐帯の種別(親族か同僚か友人かなど)によって、得られる支援が異なることを指摘している。また、ウェルマン(Wellman 1979 = 2006)も、親密な関係においてさえ、通常時と緊急時では援助を提供してくれる相手が異なり、しかも援助してく

れるのは、親密な相手の一部に過ぎないことを明らかにしている。つまり、「親密な友人と言っても、交際を楽しむためだけに会う友人もいるし、日頃から助け合う友人もいる。親密な親族のなかには、どんな問題であれ緊急時に頼りになる人もいれば、そうでない人もいる。毎日顔を合わせる親密な親族もいれば、年に1度しか会わない親密な友人もいる」(Wellman 1979 = 2006: 187)ということだ。これは「親密性」という概念が多義的であることを意味すると同時に、そうした様々な種類の親密な相手の中で、目的に応じた使い分けがなされていることを示している。

このように、個々の紐帯は、出会いの文脈やegoにとっての重要なカテゴリーによって分節化される傾向にある。ただし、そうした位置づけは必ずしも長期にわたって安定しているとは限らない。たとえば、同級生のクリークを考えた時、個々の紐帯は、卒業後の移動や生活世界の分散により、弱まったり消滅したりするだろう。結果的に、同級生クリークは解消し、特定の者とだけ個人的につながる形態に変化する。会社の同僚や親族の場合は、同級生とは成員性の安定性が異なるが、やはり個々の紐帯のあり方は状況の変化に応じて変わっていくのが通例だろう。

生涯の間に個々の紐帯の位置づけがどのように変化し得るかについては、カーンとアントヌッチ(Kahn and Antonucci 1980 = 1993)が興味深い事例を紹介している。図3は、2児を持つ1人の既婚女性のコンボイ(人生の道連れ)が、35歳時点と75歳時点で、どのように変化するかを示したものである。図の中心に位置する「P」がegoであり、3つの同心円が個々の紐帯との関係の深さを示している。35歳当時、最も内側の円は主に親きょうだいで占められていたが、そのうち75歳まで残っているのは「姉1」だけであり、第2の円にいた「隣人2」「児童期以来の友人3」「娘」が第1の円に移動している。このように、個々のネットワーク構成員との紐帯は、出会いの文脈やある時点のカテゴリーによって使い分けられているが、そうした使い分け(egoにとっての役割)は必ずしも固定化されているわけではなく、時間の経過と共に変化する可能性がある⁴⁾。

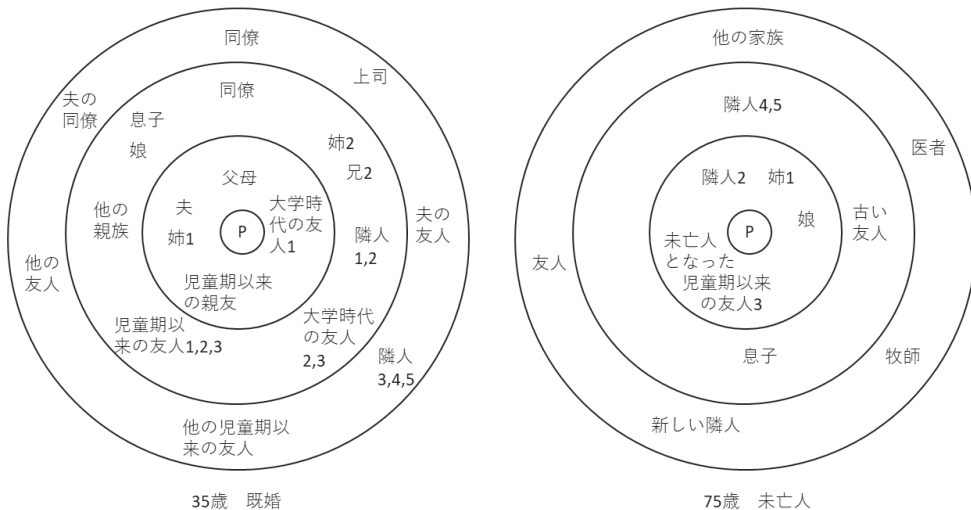


図3 年齢によるコンボイの変化

注) 内側の円から順に「長期にわたり安定し、もはや役割に依存しないコンボイの成員」「やや役割に関連しており、時間の経過に伴って変化する可能性のあるコンボイの成員」「役割関係に直接結びついており、役割の変化に最も影響を受けやすいコンボイの成員」を意味する。Kahn and Antonucci (1980 = 1990) より作成。

個々の紐帯は、時間的に変化するだけでなく、それぞれが果たす機能も多様であり得る。この点に関連して、ボルガッティほか (Borgatti et al. 2009; Borgatti et al 2014) は、紐帯の「状態 (State)」と「出来事 (Event)」を区分することを提案した。この区分にしたがえば、友人という「状態」の相手を、商業目的に利用するという「出来事」が生じるというように、同じ人物に対して異なる関係が共起することを理解できるとされる。矢部 (2000) の年賀状調査において、学校や職場といったカテゴリーは同じでも、その意味づけ (役割) は対象者によって異なると指摘されていることは、社会関係のカテゴリー (状態) と相互作用の意味づけ (出来事) を区分すると理解しやすい。

以上のことから、出会いの文脈を根拠に紐帯の性質を固定的に意味づけるのではなく、現在の ego にとって重要な交際相手と見なされている者は誰であり (状態)、どのようにつき合っているか (出来事) を明らかにすることが重要だと言える。

3. ネットワークの影響とは

3.1. ネットワークの影響と選択

以上をふまえ、ネットワークによる「影響 (social influence)」が存在するのか、単に、もともと似通った性質の構成員を「選択 (social selection)」しているに過ぎないのかという冒頭の疑問について、改めて考えてみたい。

この問題に関しては、いくつかの研究 (de Klepper et al. 2010; Brechwald and Prinstein 2011; Neal and Veenstra 2021) が整理しているように、特に青少年期の友人ネットワークがもたらす影響に着目して検討されてきた。具体的には、飲酒・喫煙・薬物使用のような逸脱行動、あるいは価値観や信念の共有などに関する友人同士の類似性が、友人の「選択」によるのか、友人同士で「影響」し合うことによるのかという形で、コーエン (Cohen 1977) 以来、研究が積み重ねられてきた。

これらの知見を整理した研究 (Brechwald and Prinstein 2011; Neal and Veenstra 2021) は、「選択」と「影響」の双方を認める結果が得られていると報告している。また、デクレッペルほか (de Klepper et al. 2010) は、「選択」の効果を強調する先行研究の多くが、生徒達の目立った逸脱行動に着目していたことを指摘し、個人の意見や態度のように「可視性 (visibility)」の低い特性については、それに基づいて選択が行われる傾向は弱く、むしろ構成員同士の影響によって説明できることを、自らの実証研究の知見とともに主張した。

ところで、社会学では、友人「選択」の問題を考える際に、ホモフィリー (homophily) という概念を用いることが多い。ホモフィリーとは、似た者同士が友人関係を築く傾向のことを指し、性質の異なる者同士が友人になる傾向を意味するヘテロフィリー (heterophily) とともに、ラザースフェルドとマートン (Lazarsfeld and Merton 1954) による造語である⁵⁾。彼らが具体的に検討したのは、「友人同士か否か」と「人種に関する態度が共通か否か」の組合せとその変化であった。研究の結果、そもそも似た価値観の者同士が友人関係になりやすく (価値観ホモフィリー)、価値観が異なっても付き合ううちに互いの考え方が似通ってくる (ネットワークによる社会化) や、価値観の異なる友人関係 (ヘテロフィリー) は反目し合うため関係が解消されやすいことから、ヘテロフィリーではなくホモフィリーが多く観察されるだろうと論じている。つまり、ホモフィリー概念は、あくまでヘテロフィリーと対で考案されたものであり、ネットワークによる社会化も想定されていた。また、ラザースフェルドらの研究では、誰もが明確な価値観を持ち、相手も

それを知っていると想定したが、デクレッペルほか(de Klepper et al. 2010)も指摘したように、人々の態度は必ずしも可視性が高いものではないし、そもそも事前に明確な意見を持っているとも限らない。

マクファーソンほか(McPherson et al. 2001)は、年齢・性別・人種・宗教・学校・職場など様々な側面から、属性・価値観・態度などに関するホモフィリーの研究成果を整理している。それによれば、地理的な近さは接触の容易さによって、学校・職場などの組織的文脈は、年齢・性別・行動様式などの類似性に基づいて組織内が区分されることによって、あるいは組織構造上類似の位置づけによってホモフィリーの原因となる。他方、親族集団は、性・年齢・価値観・態度などの多様性を持つため、ヘテロフィリーを生む要因になる。これらの知見は、ネットワークの影響を生み出す背景を理解する上で参考になる。

以上より、ネットワーク内の類似性を、「選択」の観点からのみ理解するには無理があり、ネットワークの「影響」についても併せて検討することが有益だとわかる。

3.2. 組織におけるネットワークの影響

ネットワークの影響は、企業組織を対象に数多く研究されてきた。たとえば、フリードキン(Friedkin 1993)は、組織内における個人間の影響とネットワークの構造特性(結合・類似性・中心性)の関連について理論的に整理している。まず、構造的に結合しているほど、地位が類似しているほど、中核に位置するほど、コミュニケーション頻度が増し、互いの意見の可視性も高まり、相手が自分にとって価値ある情報を持つか否かもわかる。それが価値ある情報であれば影響を受け(同化)、互いの意見が明確になれば相互圧力(cross-pressures)が作用し、意見調整が促進される。

業務遂行に重要な知識の判断に準拠人(referents)が与える影響に着目したワン(Wong 2008)の研究も、フリードキン(Friedkin 1993)とよく似た観点から分析を行っている。具体的には、結合的準拠人・構造的同等準拠人・中核的準拠人が判断に与える影響を検討し、結合的準拠人と構造的同等準拠人が影響する一方で、中核的準拠人は影響しないことを明らかにしている。

ところで、一般に、中核的地位には中核-外縁パターン(core-periphery pattern)が働くとされる(Friedkin 1993)。つまり、ネットワークの中核的地位にある者たちは相互に親密に交流するとともに外縁部の者ともつながる一方で、外縁部の者同士の間では交流がないか非常に少なく、むしろ中核的地位にある者と頻繁に交流する傾向が認められる。その結果、中核的地位にある者は多くの(価値ある)情報資源を持つ可能性が高く、権力も強くなりやすい。そのため、ワンの研究でも、中核的準拠人は相対的に強い権力を持ち影響力も強いと予想されたが、結果は異なった。この点について、ワンは、中核的地位にある準拠人と周辺的地位にあるegoでは、業務内容も必要とする知識も異なることが原因だろうと推察している。たとえば、中核的地位にある医師は、一般に看護師よりも強い権力を持ちがちではあるが、両者は仕事の内容も必要な知識も異なるため、看護師業務の判断においては、医師が準拠人となることは少ないだろうということだ。

中核的地位を占めることの意味については、ヴェンカタラマニほか(Venkataramani et al. 2016)も興味深い指摘を行っている。一般的には、職務上で中核的地位にある者ほど意見を表明する傾向にあるが、インフォーマル・ネットワークにおいてチームのメンバーから忌避されている場合には、その限りではないという。また、本人だけでなく、インフォーマル・ネットワーク

における上司の位置づけも ego の態度に影響すると指摘した。前節でも指摘したように、全体的な関係構造の中で 2 者関係をとらえるという視点がネットワーク研究のメリットだと言えるが(野沢 2009)、その際には、本人のフォーマルな地位だけでなく、自他のインフォーマルな地位も含めて、考慮すべきだということになる。

公的關係と私的關係については、仕事情報に関する知的な社会化と、友人ネットワークによる同化に着目したモリソン (Morrison 2002) の研究も参考になる。分析の結果、組織全体の規範や目標など一般的な内容についての社会化には、規模が大きく構成が多様であるほど有効である一方で、特定タスクへの熟達やその役割期待に関する社会化には、高密度の強い紐帯ほど有効であることが明らかにされた。一方、友人ネットワークは、その構成が多様で、成員の地位が高いほど、また、彼らとの紐帯が強いほど、組織へのコミットメントが促進されることなども明らかにされている。

以上の知見は影響の対象という観点から以下のように整理できる。1) 特定情報の伝達や同化には高密度の強い結合が有効である (Friedkin 1993; Morrison 2002)。2) 一般的な情報の伝達には、グラノヴェッター (Granovetter 1973 = 2006) も着目したような、多様な弱い紐帯が有効である (Morrison 2002)。3) 準拠枠の効果は、高密度なら強い結合が、低密度なら構造的類似性が有効である (Wong 2008)。

ただし、これらの知見は、企業組織における調査に基づくものなので、ネットワークの影響一般に適用できるとは限らない。ワン (Wong 2008) も、特定業務への影響と個人的問題に対する影響は異なり得ることを指摘している。なお、ここでは組織上の位置づけに関する知見には、あまり言及しなかったが、それは 1 人の人間は複数の地位を占めるという社会学の常識を考慮してのことである。ヴェンカタラマニイほか (Venkataramani et al. 2016) の研究からもわかるように、企業組織という明確な境界のあるネットワークにおいてさえ、地位の中心性の効果は、ego 自身のフォーマルな地位だけでなく、インフォーマルなネットワークにおける自他の地位を考慮する必要があったことを思い出してほしい。

3.3. インフォーマルなネットワークの影響

以上をふまえ、インフォーマルなネットワークにおける影響についても確認しておこう。

キルダフ (Kilduff 1990) は、MBA の学生を対象とした調査から、友人関係というインフォーマルな関係が就職活動という個人的な選択にどう関わるかを研究している。その結果、仕事の選好や学問専攻を統制しても、友人同士は、相互比較によって選好の同化が生じるため、同じ企業を選択する傾向にあることを明らかにした。ここからキルダフは、客観的基準がない場合や個人的に重要な判断を行う際には、自分と類似した相手との比較が重要であると結論づけている。

小学生の保護者を対象に、家庭や学校における子どもの教育への参加 (involvement) と親のネットワークとの関連を検討したシェルドン (Sheldon 2002) は、学校教育への参加 (PTA 活動への参加など) には同じ学校の保護者のネットワーク規模が、家庭教育への参加 (宿題をみるなど) には、学校外での親のネットワーク (親族・他の学校の保護者・教育関係者など) の規模が、それぞれ関与することを明らかにしている。この結果は、行為の種類によって影響するネットワークの種類も異なることを意味するとともに、ego が目的によってネットワークを使い分けていることを

示唆する。

コックスら (Cox et al. 2021) は、子どもの世話・子育てへのアドバイス・教育情報という3つの重要な道具的資源へのアクセスが、ネットワーク自体の特徴および親のSESによってどのように異なるかを検討した。分析の結果、ネットワーク規模・紐帯の強さ・構成員の社会的・経済的な多様性が資源へのアクセスにとって重要であること、ただし、それらはego自身の人種と社会的・経済的地位の組合せによって異なることを明らかにした。

以上から、友人など自分と類似している相手とは、類似しているがゆえに関係が生まれ(選択)、また交流することで相手との比較による意見調整が同化をもたらす(影響)可能性 (Kilduff 1990)、相手との出会いの文脈によって入手する資源や規範が異なる可能性 (Sheldon 2002)、ネットワークの影響はネットワーク自体の特徴とego自身の属性の組み合わせによって異なる可能性 (Cox et al. 2021) などを検討する必要があると言えるだろう。

4. ネットワークの5つの機能

4.1. ネットワークの参照機能

最後に、筆者がこれまで取り組んできた、親の教育態度に対するネットワークの影響を題材にしながら、ネットワークの影響を5つの機能という観点から取り扱うことを提案したい。

個人の行為に対するパーソナルネットワークの影響には、個人の選択や行動を制約する規範的制約と、個人が利用できる資源(支援)を提供する働きとの2つがあるというのが従来の一般的な理解であった (Granovetter 1973 = 2006; 大谷 1995)。たとえば、ボット (Bott 1955 = 2006) は、夫婦の持つネットワークの結合度が規範的制約の強さに影響し、それが夫婦の役割分離度を規定することを明らかにした。「磁場としてのネットワーク」を論じた野沢 (1995) も、ネットワークによる規範的制約の地域差が支援のあり方にも影響することを詳細に描いた。一方、子育てネットワーク研究が注視したのは、母親に対する育児支援機能であった。母親が単一の育児主体となりがちな現代日本社会では、子育て環境は親の形成する育児ネットワークに規定されること (渡辺 1994)、特に都市部では、非親族による育児ネットワークが支援の提供において重要な役割を果たしていること (落合 1989)、などが明らかにされてきたからである。

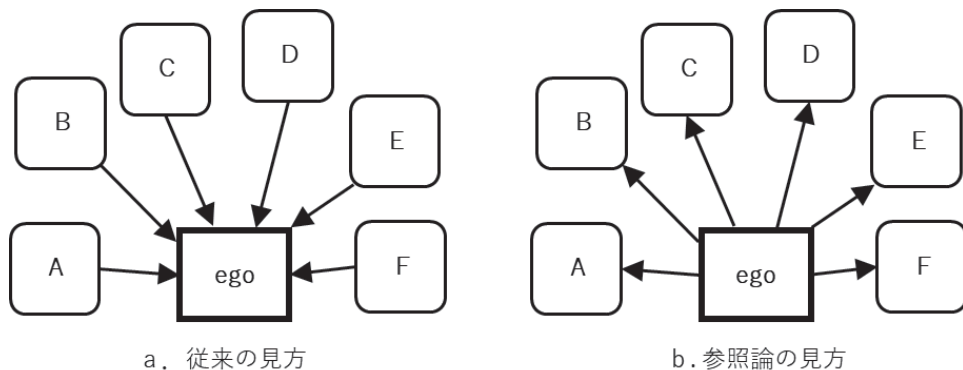


図4 ネットワークの影響の方向性

ところで、ネットワークが規範的制約をもたらすという視点も、子育ての資源（支援）を提供するという視点も、図 4a に示したように、ネットワークの影響は構成員から ego にもたらされると見ている点では共通している。前節で紹介したネットワークの影響に関する研究も、その視点に立つものが多かった。これに対し、荒牧 (2019) は、マートン (Merton 1957 = 1961) の準拠集団論を採用し、ネットワーク構成員が ego の準拠集団となっている可能性を指摘した。つまり、親たちは、図 4b のように、準拠集団である自分の親族や友人・知人の地位や考え方を選択的かつ意図的に参照して、自らの子育て行為を方向づけているのではないかと、ということである。実際、小中学生の母親を対象とした調査データの分析から、1) 交際相手が高学歴であったり、高学歴志向を持ったりしているほど、ego 自身も高学歴志向を持ちやすいこと、2) 子どもの進路を考える際には、自分を支援してくれたり、気持ちを共有できる相手ほど参照相手として選ばれる一方で、居住距離や会話頻度は関連しないことなどを明らかにした。これらの結果は、母親たちが、単に身近でよく接触している相手ではなく、何らかの意味で自分にとって頼りになる相手を自ら選択して意図的に参照しているとする「参照論」の有効性を示唆している。

このように、ネットワークには、従来から認められてきた、規範的制約や資源提供（支援）の働きだけでなく、参照機能もあると考えることができる。意見の相互調整に関するフリードキン (Friedkin 1993) の理論、準拠人に関するワン (Wong 2008) の分析、友人との比較を検討したキルダフ (Kilduff 1990) の研究などからも、参照機能について検討する意義は明らかだろう。

4.2. ボルガッティとハルジンの分類

ボルガッティとハルジン (Borgatti and Halgin 2011) は、ネットワークの機能を紐帯の作用に関する「モデル」と「研究焦点の伝統 (Research Tradition)」から、表 1 の 4 つに分類することを提案した。第 1 に、紐帯の働き方は、「流れ (flow) モデル」と「結合 (coordination) モデル」に区分される。このうち「流れモデル」とは、ネットワークにおける紐帯を、情報や資源などが流れる管 (pipes) にたとえたモデルのことを指す。グラノヴェッターの弱い紐帯の強さ理論、ウェルマンが問題にした様々な支援など、代表的なネットワーク理論は、資源や情報が紐帯を管のように通って流通することに着目しており、「流れモデル」になる。流れモデルはさらに、ソーシャルキャピタルを扱う「資本化 (capitalization)」と、同質性を問題にする「伝播 (contagion)」に分類される。上述の代表的なネットワーク理論は「資本化」を問題にしてきたと言えるだろう。一方、参照論が着目するのは、ネットワーク内で考え方や態度が似通うことを扱った「伝播」の機能ということになる。

ただし、参照論は、単に周囲の行為や考え方を無批判に受け入れることのみを想定しているわけではない点に注意して欲しい。図 5 に示したように、周囲からの働きかけがあったにせよ (右向き矢印)、ego 自身の観察によるにせよ (左向き矢印)、周囲の行為や考え方を参照した ego 自身の評価や判断によって、同調するか否かが決定されるとの理解に基づいている。マートン (Merton 1957 = 1961) の準拠集団論に照らすなら、周囲の行為や考え方を参照し、それらを受け入れる規範的準拠に加え、他者の行為や考え方を参照して自身と比較するという比較的準拠の側面も含んだ考え方になる。

表1 Borgatti and Halgin (2011) の分類

Model	Research tradition	
	Social capital	Social homogeneity
Network flow model (ties as pipes)	Capitalization	Contagion
Network coordination model (ties as bonds)	Cooperation	Convergence

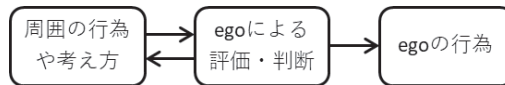


図5 参照論における「ネットワークの影響」の理解

なお、ボルガッティらは、伝播について、ネットワーク構成員と ego の双方が積極的か否かによる4分類も提案している。この4分類のうち、上記までの議論から抜け落ちているのは、どちらも意図しないうちに影響をおよぼし合う「浸透」のケースになる。先行研究における同質性の議論には、この浸透への言及も含まれてきたと言えるだろう。

以上の「流れモデル」に加えて、ボルガッティらは「結合モデル」という見方も紹介している(表1下段)。これは、資源や情報の伝達経路としての紐帯ではなく、紐帯が人々を結合させること自体の働きに着目したもので、ソーシャルキャピタルを問題にする「共同 (cooperation)」と、同質性を問題にする「収斂 (convergence)」に分けられる。前者は、つながりの構造が権力に関わるとする実験的な交換ネットワーク研究を想定し、後者は、構造的同値の場合に同質性を示すことを想定している。このように結合モデルに関するボルガッティらの関心自体は本稿の範囲外となるが、紐帯が人々をつなぐこと自体は、ネットワーク研究が伝統的に最も重視してきた側面だとも言える。これに関連して、生涯にわたる重要な人間関係をコンボイ (人生の道連れ) という概念で描いたカーンとアントヌッチ (Kahn and Antonucci 1980 = 1990) は、コンボイがもたらす「社会的支え」に、具体的な支援だけでなく、肯定的な情緒や是認のやり取りも含めて定義している。また、年賀状調査を行った矢野 (2000) は、学校時代の友人は、支援を提供することは少ないが、同じような生き方をした事実から、人々に安心感をもたらすと指摘した。つまり、存続型コミュニティであれ解放型コミュニティ (Wellman 1979 = 2006; Wellman and Leighton 1979 = 2012) であれ、結合自体が人々に居場所を提供し、安心感や精神的安定などの利益をもたらす働きがあると想定することができる。

4.3. ネットワークの5つの機能

以上をふまえ、本稿では、パーソナルネットワークの機能として、従来から着目されてきた支援機能と制約機能に加えて、参照機能、浸透機能、居場所機能を加えた5つの働きに整理することを提案する。

支援機能： ネットワーク構成員から ego に対して支援が与えられる働き。育児支援に関する先行

研究では、手段的・経済的・情緒的・情動的支援が取り上げられてきた。

制約機能：ネットワーク構成員から ego に与えられる規範的制約。高密度なクリークにおいて発生しやすい。望まない同調の強要など、負の側面も含む。

参照機能：ego がネットワーク構成員を意図的・選択的に参照する働き。構成員の行動や考え方を手本（ロールモデル）にする模範的参照（模範機能）と、自分との比較対象にする比較的参照（比較機能）がある。なお、模範的参照について、荒牧（2019）や二見・荒牧（2021）では規範的参照（規範機能）と呼んできたが、上記の規範的制約との混乱を避けるため、本稿では、模範的参照（模範機能）と呼ぶことにした。

浸透機能：ego もネットワーク構成員も意図しないうちに、影響を及ぼし合い態度が類似する働き。多くの先行研究が問題としてきた同化には、こうした意図せざる影響も含まれてきたと言えるだろう。

居場所機能：つながっていること自体から生じる安心感や居場所感を提供する機能。実際に支援や参照が生じれば、支援機能や参照機能となるが、居場所機能がとらえるのは、それらへの期待や過去の経験から生じる、ego の主観的な感覚になる。具体的には、気持ちが通じる、わかり合えるという感覚や、一緒に協力して物事を行えるという期待感などを指す。

なお、前節で整理したように、ネットワークの影響に関する従来の研究は、情報伝達や意見の同化に着目することが多かった。このうち情報伝達には、情動的支援によって ego にとって有益な情報が周囲から伝えられる場合と、ego による意図的な参照とが含まれ得る。他方、同化については、構成員からの同調の強要と言える制約、ego による参照に基づく積極的な同調、および誰も意図しない浸透があり得る。

5. 終わりに

社会調査データに上記の道具立てを適用して、ネットワークの影響について検討していくことが今後の課題となる。特に重要なのは、1) 分節化されたネットワークの意図的な使い分けを前提に、2) 研究対象とする行為を特定してネットワークの特性を調査すること、3) 上記の5つの機能に着目して影響を把握することの3点になる。なお、コックスら（Cox et al. 2021）が指摘したように、ネットワークの影響がネットワーク自体の特徴と ego の属性の組み合わせによって異なる可能性についても検討する必要がある。

注

- 1) もちろん、たとえば「普段つき合いのある人々」からの意図せざる影響を問題にしたい場合には、「普段つき合いのある人々」のネットワークを対象にすることが必要になってくる。しかし、本稿のように交際相手の「選択」か「影響」かを問題にする場合には、意図的なネットワーク利用について考察することが重要な課題となる。
- 2) 特定の紐帯がネットワーク内の2点を結ぶ唯一の経路となっている場合をブリッジと呼ぶ。局所ブリッジとは、厳密にはブリッジではないが、多くの者にとって最短のルートであり、効率的な経路であるような場合を指す（Granovetter 1973 = 2006）。
- 3) 具体的には、「現在の接触頻度が高いカテゴリー（現在の職場の同僚や趣味仲間など）」「特定の時期に親密であったカテゴリー（学生時代の友人など）」などが示されている。なお、調査対象者自身に

年賀状の相手をカテゴライズしてもらったところ、その方法は人によって様々であったが、親族については独立のカテゴリーとする例が多かったと報告されている。

- 4) もちろん、この事例においては、75歳という年齢のため、少なくない数のネットワーク構成員が亡くなっていることも、コンボイの構成の変化に影響している。
- 5) 英語には適当な用語がなかったため、婚姻関係において同様の傾向を表す、同類婚 (homogamy) や異類婚 (heterogamy) を真似て作られた。

文献

- 荒牧草平, 2019, 『教育格差のかくれた背景：親のパーソナルネットワークと学歴志向』勁草書房。
- Borgatti, Stephen P., Daniel J. Brass, and Daniel S. Halgin, 2014. "Social network research: Confusions, criticisms, and controversies," *Contemporary Perspectives on Organizational Social Networks (Research in the Sociology of Organizations, 40)*, Emerald Group Publishing Limited: 1-29.
- Borgatti, Stephen P. and Daniel S. Halgin, 2011, "On Network Theory," *Organization Science*, 22(5): 1168-1181.
- Borgatti, Stephen P., Ajay Mehra, Daniel J. Brass, Giuseppe Labianca, 2009, "Network Analysis in the Social Sciences," *Science*, 323(5916): 892-895.
- Bott, Elizabeth, 1955, "Urban Families: Conjugal Roles and Social Networks," *Human Relations*, 8: 345-384 (=2006 野沢慎司訳「都市の家族－夫婦役割と社会的ネットワーク－」野沢慎司監訳『リーディングス・ネットワーク論』勁草書房: 35-91)。
- Brechwald, Whitney A., and Prinstein, Mitchell J., 2011, "Beyond Homophily: A Decade of Advances in Understanding Peer Influence Processes," *Journal of Research on Adolescence*, 21(1): 166-179.
- Cohen, Jere M., 1977, "Sources of Peer Group Homogeneity," *Sociology of Education*, 50(4): 227-241.
- Coleman, James S., 1988, "Social Capital in the Creation of Human Capital," *American Journal of Sociology*, 94: 95-120 (= 2006, 金光淳訳「人的資本の形成における社会関係資本」野沢慎司編・監訳『リーディングスネットワーク論：家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房: 205-238)。
- Cox, Amanda Barrett, Amy C. Steinbugler, and Rand Quinn, 2021, "It's Who You Know (and Who You Are): Social Capital in a School-Based Parent Network," *Sociology of Education*, 94(4): 253-270.
- de Klepper, Maurits, Ed Sleebos, Gerhard van de Bunt, and Filip Agneessens, 2010, "Similarity in Friendship Networks: Selection or Influence? The Effect of Constraining Contexts and Non-visible Individual Attributes," *Social Networks*, 32: 82-90.
- Friedkin, Noah E., 1993, "Structural Bases of Interpersonal Influence in Groups: A longitudinal case study," *American Sociological Review*, 58: 861-872.
- 二見雪奈・荒牧草平, 2021, 「母親の育児不安に対する育児ネットワークの多様な効果－支援機能と参照機能の違いに着目して」『日本女子大学紀要 人間社会学部』31: 37-50.
- Granovetter, Mark S., 1973, "The Strength of Weak Ties," *American Journal of Sociology*, 78: 1360-1380 (= 2006, 大岡栄美訳「弱い紐帯の強さ」野沢慎司編・監訳『リーディングスネットワーク論：家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房: 123-154)。
- Kahn, Robert L. and Toni Antonucci, 1980, "Convoys Over the Life Course: Attachment, Roles, and Social Support," Paul B. Baltes, and Orville G. Brim Jr. (Ed.) *Life-span Development and Behavior, Vol.3*: 253-286 (= 1993, 遠藤利彦・河合千恵子訳「生涯にわたる『コンボイ』：愛着・役割・社会的支え」東洋・柏木恵子・高橋恵子編集・監訳『生涯発達の心理学 2巻 気質・自己・パーソナリティ』新曜社: 33-70)。
- Kilduff, Martin, 1990, "The interpersonal structure of decision making: A social comparison approach to organizational choice," *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 47(2): 270-288.
- Laumann, Edward O., Peter V. Marsden, and David Prensky, 1983, "The Boundary Specification Problem in Network Analysis." Ronald S. Burt, Michael J. Minor, eds. *Applied Network Analysis: A Methodological Introduction*. Sage, Beverly Hills, CA: 18-34.
- Lazarsfeld, Paul F. and Robert Merton, 1954, "Friendship as Social Process: A Substantive and Methodological Analysis," Morroe Berger, Theodore Abel, and Charles H. Page, eds, *Freedom and Control in Modern Society*, D. Van Nostrand Company, Inc. : 18-66.
- 落合恵美子, 1989, 「現代家族の育児ネットワーク」『近代家族とフェミニズム』勁草書房: 93-135.

- 大谷信介, 1995,『現代都市住民のパーソナル・ネットワーク』ミネルヴァ書房.
- 前田尚子, 2008,「地方都市に住む育児期女性のパーソナル・ネットワーク」『家庭教育研究所紀要』30: 5-13.
- McPherson, Miller, Lynn Smith-Lovin, and James M. Cook, 2001, “Birds of a Feather: Homophily in Social Networks,” *Annual Review of Sociology*, 27: 415-444.
- Morrison, Elizabeth W., 2002, “Newcomer’s Relationships: The Role of Social Network Ties during Socialization,” *The Academy of Management Journal*, 45(6): 1149-1160.
- Neal, Jennifer W. and Rene Veenstra, 2021, “Network Selection and Influence Effects on Children’s and Adolescents’ Internalizing Behaviors and Peer Victimization: A Systematic Review,” *Developmental Review*, 59:
- 野沢慎司, 1995,「パーソナル・ネットワークのなかの夫婦関係」松本康編『増殖するネットワーク』勁草書房: 175-234.
- 野沢慎司, 2009,「ネットワーク論への再招待：『特殊な方法』という神話を越えて」『文化人類学研究』10: 28-46.
- Sheldon, Steven B., 2002, “Parents’ Social Networks and Beliefs as Predictors of Parent Involvement,” *The Elementary School Journal*, 102(4): 301-316.
- Venkataramani, Vijaya, Le Zhou, Mo Wang, Hui Liao, and Junqi Shi, 2016, “Social networks and employee voice: The influence of team members’ and team leaders’ social network positions on employee voice,” *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 132: 37-48.
- 渡辺秀樹, 1994,「現代の親子関係の社会学的分析：育児社会論序説」社会保障研究所変『現代家族と社会保障』東京大学出版会: 71-88.
- Wellman, Barry, 1979, “The Community Question : The Intimate Networks of East Yorkers,” *American Journal of Sociology*, 84 : 1201-1231 (=2006, 野沢慎司・立山徳子訳「コミュニティ問題－イースト・ヨーク住民の緊密なネットワーク－」野沢慎司監訳『リーディングス・ネットワーク論』勁草書房: 159-200).
- Wellman, Barry, and Barry Leighton, 1979, “Networks, Neighborhoods, and Communities: Approaches to the Study of the Community Question,” *Urban Affairs Review*, 14(3): 363-390 (= 2012, 野沢慎司訳「ネットワーク、近隣、コミュニティ：コミュニティ問題研究へのアプローチ」森岡清志編『都市空間と都市コミュニティ』日本評論社: 91-126).
- Wellman, Barry, and Scot Wortley, 1990, “Different Strokes from Different Folks: Community Ties and Social Support,” *American Journal of Sociology*, 96(3): 558-588.
- Wong, Sze-Sze, 2008, “Judgement about Knowledge Importance: The roles of Social Referents and Network Structure,” *Human Relations*, 61(11): 1565-1591.
- 矢部拓也, 2000,「事例分析：年賀状による拡大パーソナルネットワークの分析」森岡清志編『都市社会のパーソナルネットワーク』東京大学出版会: 161-193.